

4. パウロの異邦人伝道（使徒 9～28 章）

パウロ（サウロ）はステパノの殉教に関わった後、ダマスコ途上で復活のキリストと出会い、回心します。その後、アンティオキア教会での奉仕を経て、聖霊に導かれて第一次伝道旅行として、バルナバと一緒にキプロス、ピシディア（トルコ中部）に派遣されます。

以後、パウロは第二、第三の伝道旅行を通して、アジアやヨーロッパ各地に福音を伝えます。彼のメッセージは「恵みにより、信仰によって救われる」というシンプルかつ力強い福音であり、律法ではなく、十字架と復活による義認を説きました。

パウロの戦略は、まず会堂に行ってユダヤ人に、次に異邦人に福音を語ることでした。当時、会堂は各地に数千か所あり、伝道の起点となりました。しかし、ユダヤ人からの拒絶により、次第に異邦人への伝道が主となり、エペソ、ピリピ、コリントなど多くの教会が誕生します。

一方、パウロは聖霊の導きに非常に敏感でした。自分の計画が閉ざされたときには祈り、幻によって与えられたマケドニア宣教へと踏み出します。パウロは常に「自分の計画」ではなく「神の導き」に従いました。

最終的にパウロは囚人としてローマへ送られ、そこで訪問者たちに福音を語り続けました。ルカは使徒の働きを「少しもはばかることなく、神の国を宣べ伝え、主イエスを教えた」（使徒 28：31）と締めくくります。

5. おわりに

使徒の働きは「未完」で終わっています。それは、神の国の拡大が今も続いていることを示しています。私たちも聖霊に導かれ、日常の中で神の器として用いて頂きたいと思います。神は名もなき信徒たちを通して世界を変えられました。今、その働きは私たちに委ねられています。

<参考>

○教会成長の締め括り箇所

使徒 2：47、6：7、9：31、12：24、16：5、19：20、28：30～31